

## 「しまね遺産 日本庭園」の危機

林 秀 樹

### 技術士が日本庭園を研究する意義

技術士の取り組む技術は、自然と対峙するものが多い。

最近では、費用対効果という呪縛に取り付かれ、コストの削減やスケジュールの短縮が求められ、技術士は、その要求に応えることに追われている感がある。特に建設系の技術士は、その傾向が強いと思われる。

建設系の技術士が取り組む仕事では、そのほとんどが完成したときが一番立派で、徐々に汚れ傷んでいくものが多い。

庭園の作庭では、どうであろうか。石を据えるにしても、川や山で探しても図面通りの石はない。入手した石材で、滝組や飛び石を作り上げていく、作庭図面は、あくまでもイメージ図であり、職人の技で作り上げる。また、植栽したばかりの庭木は、樹形が整っていないものも多く、枝振りも貧相である。樹木支柱も随所に見られる。

10年、20年経過したときに、初めて味わい深いに庭園が出現するのである。

これは、世界中同じである。樹木の刈り込みが美しいイギリスの英国式庭園、築山や中国瓦の東屋が美しい中国庭園なども、日本庭園と同じく、時間とともに美しく、落ち着いた雰囲気となる。

庭園は、工事が完了した後、造園技能の業を駆使して、手入れし、維持管理することによって、完成した姿になる。これに類似した建設系の業務では、都市計画事業や区画整理事業により街を作ることと似ている。

私が若いころ携わったニュータウンの計画では、事業が完成しても、誰もいない道路とただっ広い造成地だけである。5年、10年後には、人々が行きかい、街ができている。我々の都市計画が評価されるのは、その時である。街づくりには、庭園作りのような、職人の技は駆使できないが、都市計画の用途規制、景観誘導などによって美しい都市ができることは、庭園作りと似たところがある。

庭園を扱う技術士の分野が、建設部門の都市及び地方計画であることは、当を得たりと思うことがある。

島根県技術士会の研究課題として、日本庭園を扱う理由の一つは、このことを理解する技術士を増やすことが目的の一つだと思っている。もう一つの理由は、庭園を研究して、地域の成り立ちや地域の文化を知るよすがとすることである。

時間をかけて、費用を惜しまず作庭される庭園は、我々が日常追われている。コストやスケジュールというものを再考させられる。巨大な石材の運搬技術やデザイン力にも目を見張るものがある。

それぞれの取り組む技術士の分野は狭い。庭園の研究など、我々が忘れかけている

技能、文化、伝統というものを知るためにも、庭園研究は、大きな効果があると思っている。

### 島根の庭園は個人庭園

島根県には、足立美術館や由志園などの名庭園があり、多くの来訪者でにぎわっている。しかし、作庭されたのは、昭和に入ってからであり、その歴史は浅い。

他県を見てみると、歴史ある大きな寺院の庭園や岡山の後樂園などのような大名が残した庭園がある。大名庭園は、現在は、県や市などの公共施設として管理されている。寺院の庭園についても、その維持管理費の捻出に苦勞しているものもあるが、一般的には、寺院の規模が大きく、管理費の捻出が容易であることや観光収入があることなどから、良好に管理されているものが多い。

翻って、島根の庭園を見てみると、たたら製鉄業や豪農などの個人に大邸宅に整備された庭園が多い。いわゆる個人庭園である。個人の努力によって維持されているものがほとんどである。

そのため、庭園の維持管理費が不足しがちであり、年間の剪定回数が少なく、庭木の管理がおろそかになっていく傾向にある。

観光庭園として開放されている庭園もあるが、観覧者が少ないのが現実である。

これまで調査した庭園を見てみると、その未来に暗雲が見える。

### 維持管理と施設

建築物や道路、庭園など人々が利用する施設は、その利用がなくなると、廃墟となる。そして、壊れ、土に埋もれていく。しかし、庭園は、道路や建築物のような人工物とは異なり、自然石や樹木などを使用しているため、その変容はわかりにくい。建築物や道路、庭園など人々が利用する施設は、その利用がなくなると、廃墟となる。そして、壊れ、土に埋もれていく。庭園は、道路や建築物のような人工物とは異なり、自然石や樹木などを使用しているため、その変容はわかりにくい。

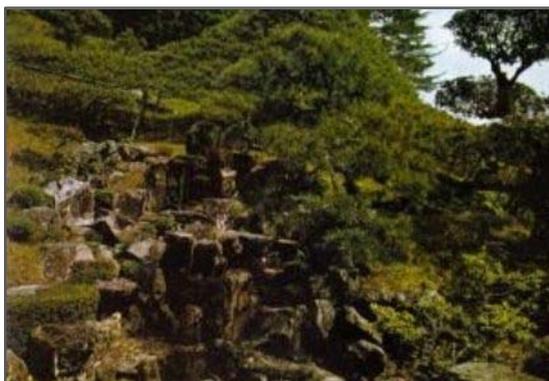
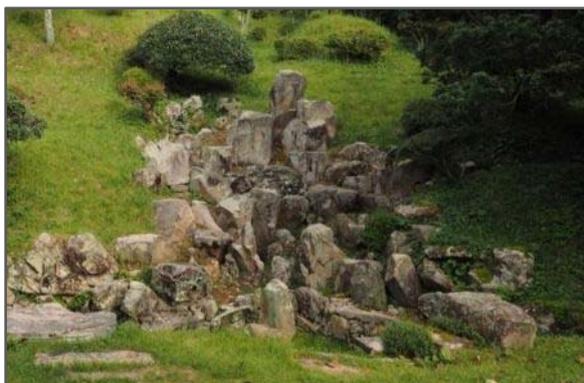
2013年に実施した津和野町の庭園研究では、その維持管理がいかに大切かを実感した庭園があった。庭の持ち主が途中で変わったのである。

1890年頃作庭されたと言われる庭園を屋敷とともに別の人が1930年頃引き継ぎ、以来80年以上立派な庭園として管理しているのである。



庭園の管理者が変わった庭園

解りやすく、次の庭で考えてみたい。



江津市 小川家の雪舟庭園 左 2015 年撮影 右 1970 年代の江津市の観光パンフレットから

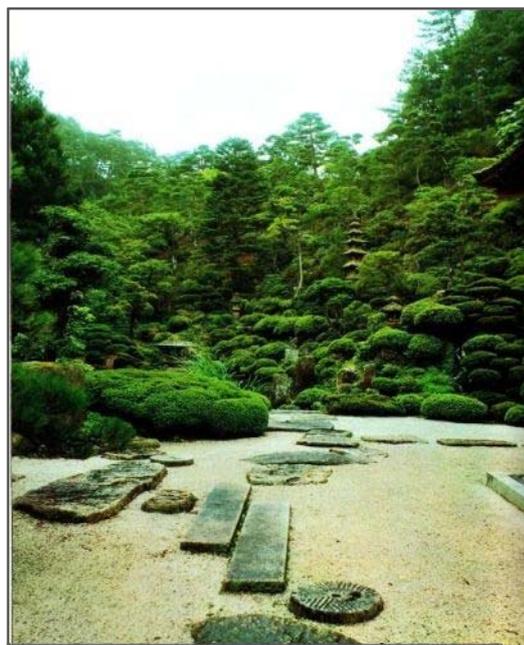
庭園のイメージが大きく変わった例である。

上の写真は、室町時代の禅僧であり画家でもあった雪舟ゆかりの庭園である。石見で絵を描き、益田市の万福寺などで作庭していたのが、1400 年代の後半であると言われていたことから、600 年経過した庭園である。

40 年前の写真が、江津市の古いパンフレットに掲載されていたので、比較してみた。最近の 40 年の変化であるが、40 年前には、主木となっていたクロマツが現在は見当たらない。ツツジの刈り込みは、40 年前から比較すると大きくなっている。600 年前、雪舟が作庭した時の庭木は残ってはいないが、石組みは大きく変わっていないと思われる。

もう一箇所古い写真と現在の庭園を比較してみる。

下の写真は、奥出雲町の絲原家の庭園である。



奥出雲町 絲原家庭園 右 2016 年 10 月撮影 左 1979 年発行 探訪日本の庭 山陰より

この庭園は、天保年間後半(1845年頃)から明治にかけて順次作庭されたと庭園案内パンフレットに記載されている。

35年前の写真と比較すると、飛び石の配置が同じであるが、つつじ等の刈り込みの度合いや借景の樹木の生長の違いが見て取れる。作庭時期は、小川家の庭園から500年近く後となるとはいえ、170年経過しており、良好に維持されている。

右の写真は、奥出雲町竹崎でタタラ製鉄を行っていたト蔵氏の庭園である。ト蔵氏は、現在は奥出雲町には居住しておらず、居宅も除却されている。そのためか、庭園も一時期、荒れていたが、少しずつ修復され、昔の庭園がよみがえりつつある。

しかし、あくまでも現在の庭園所有者の努力によるものが大きい。



奥出雲町 ト蔵庭園

### しまね遺産「出雲流庭園」の未来

これまで、研究部会庭園研究分科会では、県内各地で、数多くの庭園を調査してきた。

良好な状態で維持されている庭園も多いが、個人では維持が困難となり、市に移管され、場所を移し管理されているものも散見される。

他県では、例が少ないが、島根の庭園を保全するためには、やむをえないのかもしれない。

しかし、庭園の立地場所が変わったことから、借景の利用などが異なってしまった。斐川平野から出雲文化伝承館に移設された江角家庭園は、斐川平野と仏教山を借景に作庭されてはずである。その点からみると、庭園の魅力は、半減である。

これから、庭園研究部会では、これらを島根遺産として認定するなどして、その魅力発信と保全に努力を続けたい。



斐川町から出雲文化伝承館に移設された庭園



平田本陣記念館に移設された庭園